〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(28)〉

『ガラス絵』から見えるもの

― 重層的保育の実践から考える ―

佐治由美子

お茶の水女子大学附属いずみナーサリー（以下ナーサリー）では、二〇〇八年度より保育室の大きな窓ガラスへのペインティングを始めている。これは、一・二歳児という幼い人たちの描画としては大がかりな取り組みだといえよう。

このガラス絵の活動を通して、子どもたちと保育士との間に何が生みだされようとしているのか、その記録から見ていきたいと思う。まず、その経緯を振り返っておく。

「ステンドグラスシート」から「ガラス絵」へ

二〇〇七年度の冬のこと、保育士たちがステンドグラスシートを囲み、どんな形に切って子どもたちに提供しようかと知恵を出し合っていた。その場に居合わせた私は、一枚一枚が、淡く柔らかい一色のシートであることから、その色を子どもたちがイメージの中に活かすことができるように、単純な形状の物で提供してほしいとお願いした。そして、子

どもたちがそのシートを並べたり組み合わせたりして創った作品を、光を通してじっくり眺める、そんな鑑賞可能なスペースがあればと、ふとわきおこった願いを語った。

翌年度になり、子どもたちのステンドグラスシートの活動を支える教材として、光を通す透明な素材でできたボードを探し始めたが、保育室で使えるような安定した形状の物はなかなか見つからなかった。そこで、保育士と大学教員が協働して、乳幼児にふさわしいクリアボードの開発[1]ができないだろうかと、話は一気に膨らんだ。

そのころのナーサリーは、描画を盛んに行っていた。画用紙に描く活動だけでなく、床一面に広げた模造紙の上で、子どもたちが思い思いに絵筆を動かしたり足形をつけたりして水平方向の広がりを全身で表現する活動も行われていた。またその一方で、子どもの背丈より高いイーゼルが、保育士たちの手で段ボールを切り出すことによって作成された。壁に沿ってやや斜めに設(しつら)えられたその巨大なイーゼルの出現によって、子どもたちはしゃがんだり立ち上がったりして、垂直方向に伸びゆく線を盛んに描くようになっていた。日に日に用意される環境で、子どもたちは縦にも横にも伸びやかに描く体験を重ねていたのである。

そのような日々の中にいた保育士たちは、クリアボードの開発を考え始めたときに、ステンドグラスシートを貼るだけでなくそこに絵も描けるような多目的なボードであることを願った。シートも貼り易く絵を描いたり消したりし易い素材は何なのか、また、保育室の中で転倒しにくいボードのデザイン、転倒するような非常時にもその破片が飛び散りにくい素材は何なのかなど、考えていかなければならない問題は幾つもあった。

しかし、保育士たちは夢をもち続け、子どもたち

と試せることをいろいろにやってみようと、その前向きな姿勢が変わることはなかった。このような取り組みの中で生まれてきたのが、〝ガラス窓ペインティング〟である。

はらぺこあおむしと草むらへ

ナーサリーは、二〇〇八年度四月より自然環境をテーマとする研究[2]にも取り組んでいる。日ごろから天気がよければ散歩を日課とし、大学キャンパス内に残されている自然に親しむ実践を蓄積しているナーサリーにとって、この研究は保育士たちの意欲を高める新たなきっかけとなっていた。

その春には、ナーサリーで育てたアオムシがさなぎからチョウにかわる瞬間を、保育士たちは子どもたちと共に迎える機会にも恵まれた。その驚きに満ちた体験が子どもたちと共有され、それ以来子どもたちは『はらぺこあおむし[3]』のお話が大好きになり、繰り返し聴いて楽しむようになっていた。

そんな夏の日のこと、『はらぺこあおむし』のパネルシアターを見た子どもたちは、アオムシがチョウに変わった一瞬を再現するかのように手をバタバタさせて動き出した。そして、保育士たちがステンドグラスシートで作ったチョウやアオムシを窓ガラスに貼ると、それは光の中に浮かび上がって子どもたちのイメージを一層膨らませる素材となっていた。

窓ガラスの草むら[4]の中に貼られたアオムシに、保育士が「モゾモゾ……」と言いながら絵筆を近づけると、子どもたちは吸い寄せられるように集まってきて絵筆をとり、小さな線をそれぞれに描き始めた。

これが子どもたちの「ガラス絵」の始まりである。

窓ガラスのこちら側と向こう側

ガラス面に描くことは、紙に描くこととどんな違いがあるのだろうか。子どもの様子と重ね合わせな

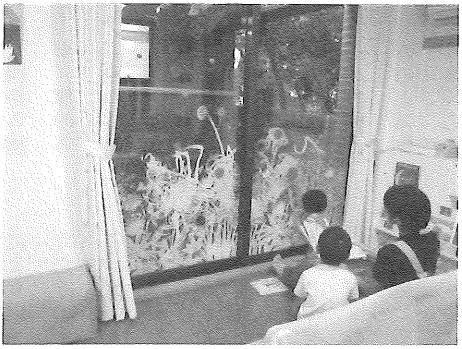
がら考えていきたい。

ある日保育士が、ステンドグラスシートのチョウのそばに、それが飛んだ軌跡のような線を窓ガラスの内側から描いてみた。すると、窓ガラスの外側にいた子どもたちが、その線を追いかけるように描き始めた。保育士がゆっくり描くと子どもたちもゆっくりと、また速く動かすと速い動きになる。窓ガラスのこちらと向こうとで、ささやかなやりとりが始まったのである。

ガラス面という透き通ったキャンバスに、保育士と子どもが、また子どもと子どもが対面し、お互いのイメージを表現し合う対話的な描画活動が展開する兆しが、ここに見えている。

このときのように実際に絵筆で表現し合う活動も

▲写真1：ガラス絵を指でなぞる



▲写真2：ベンチに座ってガラス絵を眺める

▲写真3：ガラス絵を反対側から見つめる

あれば、子どもの描いた線を保育士が反対側から指でなぞって楽しみ合う場面展開（写真1）や、窓の外側で描かれる子どもの絵を室内のベンチに座って鑑賞する子どもの出現（写真2）、また、自ら這っていき窓の内側からニコニコ眺める乳児とのやりとり（写真3）など、次々に対話的な場面が見られるようになっていった。

ガラス越しの対面は、その意味するものを内側から考えると、言葉のやりとりによる保育がむしろ閉ざされていることに気づかされる。しかし、ここに、子どもと保育士との関係が、対話的であるよう促されるという逆説が成立すると考えることもできよう。

言葉巧みである大人たちは、〝ことば〟獲得の始まりにいる子どもたちのイメージを無意識裡にからめとり、ロゴスの世界にもち去ってしまいやすい存在である。そんな大人たちが言葉を封じられることにより、子どもの〝ことば〟にならないイメージをただそのままに受けとらざるを得ない状況に置かれる。意味するものがよくわからなくても応答的であろうとする保育者と子どもとの、その関係の中にこそ生成する保育の営みの基本に、大人たちを立ち返らせてくれる、そのような側面がガラス絵には垣間見えているように思う。

ガラス絵を描く子どもたちにとって、まず両足でその場に立って絵筆をのせていくこちら側の世界があり、そこには並んで時どき笑顔を向け合う友達や背後で絵の具のお世話をしながら見守る保育士がいる。そして、描いているガラスの隙間からは、興味津々でこちらを見ている保育士や友達が見えて、向こう側の明るい世界がこちらの世界の居心地を一層快適なものへと映し出してくれているようである。

子どもを背後からも向こう側からも、その意味において重層的な関係の中で支えていく保育は、表現

する子どもの自己を強めずにはいないであろう。子どもの内なるイメージが具現化し、そのことによって子どもが自己を形づくっていこうとするプロセスの中に、ガラス絵活動の環境のすべてが位置付いているといえるのではないだろうか。

私は、このガラス絵活動をナーサリーの重層的保育の実践として取り上げた。「重層的保育」とは、層をなして育ち合う保育の営みを意味している。子ども一人ひとりが自己や他者との対話によって自己形成していくのを支える保育の場を前提としている。しかし、ここでの営みは、保育者集団が初めから共通の子ども理解に立つことを求めるものではない。保育者個々の完全ではあり得ない子ども理解が、保育の場で開かれてある中で相互に作用し合いつながり合っていく、そのような保育者間の連携が、子どもも保育者も共に育ち合う保育の場を形成する力になるのではないかと考えている。

ナーサリーにおいて、またそのほかの多くの保育の場において、まず子どもがじっくりと自分自身と対話し、さらに自分とは異なる存在である他者と対話することを通して、いつしか共に新しい価値を築いていこうとする人同士へと育ちゆく、そのような自己形成の土台となる保育が、脈々と実践されていくことを願ってやまない。

（お茶の水女子大学　幼保プロジェクト　専任講師）

注

1　レッジョ・エミリアの実践にも同様の透明素材が活用されているが、乳児保育の教材としてはこれからの研究が待たれている

2　お茶の水女子大学キャンパス内にある附属校間の連携研究

3　絵本『はらぺこあおむし』　エリック・カール／さくもりひさし／やく、偕成社

4　草むらはガラス片飛散防止シートの絵柄のこと